



撮影：窪寺茂(建築装飾技術史研究所 所長)

修理前の状況 2019 年



撮影：窪寺茂(建築装飾技術史研究所 所長)

修理前の状況(第2次修理で拡張された土間床) 2019 年

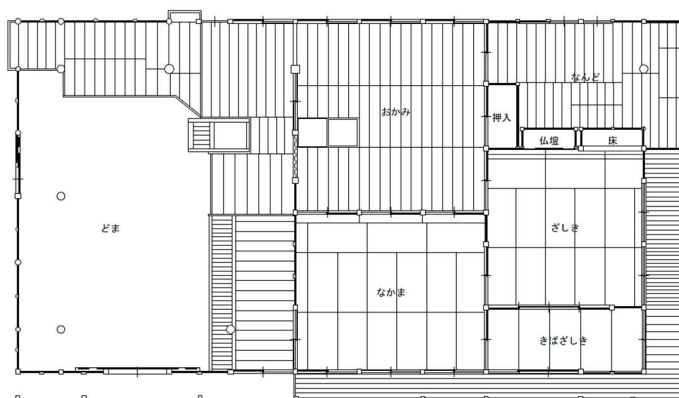


撮影：窪寺茂(建築装飾技術史研究所 所長)

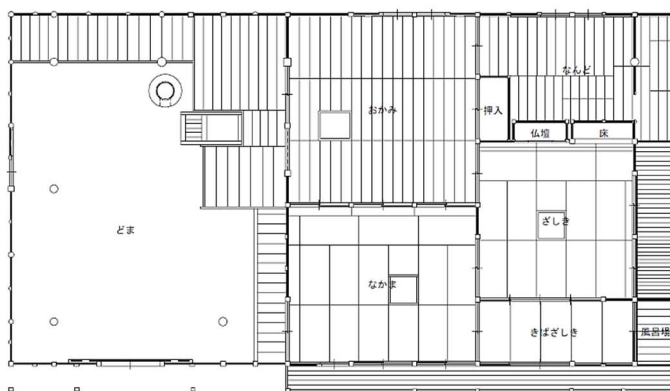
「ざしき」の床下から発見された囲炉裏の石組み



建築当初平面図 (19 世紀前半か?)

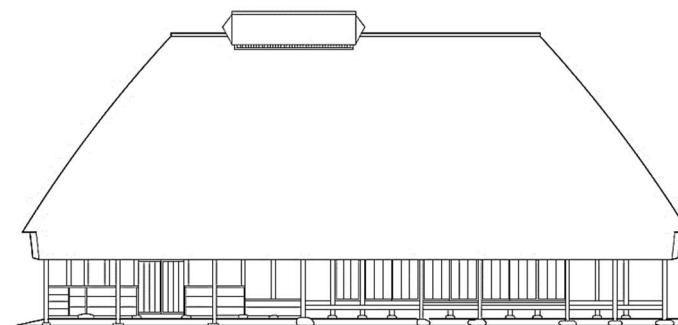


修理前平面図 (平成時代)



修理後平面図 (江戸時代末期～明治 20 年前後の状態)

岩手県有形文化財(建造物) 旧後藤正治郎家住宅



奥州市教育委員会

建物の構造等

所 在 地：奥州市前沢生母字天王52番地

所 有 者：奥州市

指 定：岩手県有形文化財（建造物）

分 類：民家

構造形式：桁行10間半、梁間 5 間半

直屋、寄棟、茅葺、真壁造、礎石建

建物の建立とその後の修理・改変

本建物は、東北地方における民家の型式を南部の曲がり家と二分する仙台藩直家の典型的な遺構です。

後藤氏の家伝によれば、この家の祖は、下姉体から兄弟で当地に移り住んだといわれています。初代が享保10年(1725)に没していることと、軒が低く古風なつくりであることから、18世紀前半の建築とされてきました。

平成31年から令和2年にかけて実施した令和の修理に伴い、前身建物のものと思われる囲炉裏の石組が発見され、転用材が多用されていることが判明。棟札や墨書などは発見されておらず、明瞭な根拠はありませんが、当時使用した大工道具の加工痕跡観察結果と全国的な大工道具の変遷との比較から建築年代は19世紀



「おかみ」の炉跡(当初床組の根太が中央にかかる石組が発見された)

前半と推定されます。

また、痕跡調査により、江戸時代末期から明治20年前後までの間（第1次修理）、大正時代後半から昭和期戦前までの間（第2次修理）および昭和期戦後から近年までの間（第3次修理）に改変を伴う大規模な修理が認められました。

第4次となる令和の修理においては、本住宅の文化財的価値と建築史的価値を最も高めると考えられる第1次修理後の姿に復原することとし、第2次修理以降で新しくなった改変部分を撤去しました。なお、構造補強の観点から第3次修理の「なかま」と「きばざしき」の天井を存置したほか、火打梁の新設と礎石の下に鉄筋コンクリート基礎を設置しています。

建築当初からの特徴

- 正面を南向きとし、南面および東面の屋根は葺下ろし。内部は西端に「どま」、中央南側に桁行3間×梁間2間半の「なかま」、その北側に桁行3間×梁間3間の「おかみ」、東端に南から桁行2間半×梁間1間の「きばざしき」、桁行2間半×梁間2間半の「ざしき」、桁行3間強×梁間2間の「なんど」を配置し、「ざしき」北面東端間を床構えとした四間取り直家の原型をとどめる。
- 本屋外側は居室の南側と東側に縁を廻す。ただし、東側縁の北端側は納戸が張り出している。
- 「おかみ」「どま」境の北より第3間に無双窓（さま）を設備している。
- 側廻りの柱間装置に袖壁引込戸を使用している。
- 「おかみ」「なかま」に加えて「ざしき」に炉がある。
- 盛土の上に建築されている。

- 柱には手斧の跡が認められ、独立柱のうち3本が16角形まで角を削り取られている。
- 下屋柱は、外から見ると半間ごとに建っているように見えるが、内側から見ると1間ごとにしか立っていない。1間ごとに柱を立てて土壁を組み、外側から半割りの柱を中間に立てて土壁を押さえている。

第1次修理（江戸時代末期から明治20年前後）に伴う改変

- 南側上屋柱筋に立つ独立柱と北側上屋柱筋に立つ独立柱の下方を切断して繫梁を挿入。
- 全面三和土仕上げであった「どま」に土間床と囲炉裏を設けた。
- 「おかみ」西面に設けられていた無双窓の上框位置を低めて縮小。
- 「どま」南面西端間に堅連子付きの明かり窓を設けるとともに西面に戸口構えを新設。
- 「おかみ」東面南脇間と中央間の土壁を撤去し、「ざしき」に通じる板戸引き違いと押入構えを設けた。
- 「ざしき」北面西寄りに立つ半柱の内法間と土壁を撤去して、床脇に仏壇構えを設けた。
- 「きばざしき」東面内法下方の土壁を撤去して板戸引き違いの開口部とし、同所外の縁廻りに天井付きの風呂場を新設した。

修理の概要

事業名称：旧後藤正治郎家耐震補強・改修工事

着 工：令和元年10月18日

竣 工：令和3年1月31日

工 事 費：99,770,000 円

（うち対象経費に岩手県文化財保護事業補助金1/2）